

表現活動を豊かにする音楽研究(2)*

— 園児の身体表現活動から —

井 中 あけみ
高 橋 うらら**

I. はじめに

本研究は、子どもたちが感性や創造性を豊かに展開させる表現活動を探究するものであり、音楽を「きっかけ」とした身体表現活動に視点を置いた調査を行って4回目を迎えた。これらは、領域「表現」を根底に、子どもたちが表現活動を柔軟に行えるよう、保育者養成機関や保育現場を通して保育者への表現教育の在り方を探っていくものである。幼稚園教育要領、保育所保育指針にある領域「表現」は、保育者自身の豊かな表現力や感知力と共に求められるものであり、保育者の役割は子どもの表現を見逃すことなく、見守り受け止めることが条件であるともいえよう。

無藤¹⁾は、乳幼児の自己表現を「芽生え部分」としている。本研究は、その未分化な「芽生え部分」期の子どもの表現に視点を置き、音楽を「きっかけ」とした子どもたちの即興的身体表現活動を通して、表現の表れ方を実験・調査していく。さらにそこから保育者の表現活動についても同様に調査し、保育者の身体表現に対する捉え方や、その位置づけ、また子どもたちの表現を如何に感じたかを調査していくこととする。

語義規定

本研究における「身体表現活動」は、「感じたことや考えたことを自由に身体で表現すること」を示す。また、「即興的身体表現活動」については、聴き馴染みのない音楽を聴き、その場で感じたまま、考えたままを身体で表現することを示す。

1. 問題の所在

一般的に表現というと、造形・音楽・舞踊・演劇などの芸術が取り上げられることが多い。子どもたちについてこれらの表現を取り上げる場合、そこには、専門的指導や個人の能力が関与するため、早期教育の効果が大きいと考えられがちである。勿論、プロの芸術家を育成するためには、その過酷な勉強、訓練に早期から取り組む必要性は十分にある。しかし、こ

* 本論は、2016年5月7日(土)・8日(日)の第69回「日本保育学会」にて、ポスター発表を行った『表現活動を豊かにする音楽研究(2) —園児の身体表現活動から—』データを基に加筆したものである。

** 東京都市大学 人間科学部 児童教育科 准教授

1) 無藤 隆監修・吉永早苗著『子どもの音感受の世界』萌文書林 2016年 p.24.

こでいう幼稚園教育要領，保育所保育指針の領域「表現」は，その範囲ではない。

清水・小松・松本²⁾は、『表現芸術の世界』の中で、「身体とはコミュニケーションのためにあり，身体は何よりも表現のメディアなのだと，一中略—それは，何よりも，他者との身体的な共存の中で，喜びや悲しみなどの人間的な感情を分かち合う『コミュニケーションの場そのもの』なのだ」と語っている。子どもたちが他者とコミュニケーションをとり，その関係を社会生活で維持していくためには，互いの感情を理解し，それを自ずと表現する能力が必要なのである。本研究は，このような視点から「表現」を考え，その中でも音楽を「きっかけ」とした身体表現活動に着眼し，そこからより多くの自己表現の方法を見出し，子どもたちの表現活動を柔軟に受け止めることのできる保育者育成を目指そうとするものである。

ここで問題として挙げられるのが，保育者自身の「表現」についての認識である。領域「表現」改訂以前の保育者，改定後の保育者，また養成期間中の学生など，時代によっても「表現」の解釈にはズレがある。またその捉え方も取り組み方も方向性が多々あることから，保育者にとっては不安な領域となってしまう場合もあろう。さらに，表現教育の価値観が技術的な側面に置かれたり，流行の表現教育に偏ったり，また大人たちが押し付けた指導やサンプル通りの実践などを強行していく中で，その内容を保育者自身が理解することの温度差も生じてしまっている。

高橋³⁾は、「子どもの表現は，その子そのものといえる。保育者がその子らしさをどのように捉え，その子には，自分らしさをどのように考えさせるのかが，大切である。子ども理解のない教育・保育はない。」と述べている。保育者は，各々の子どもたちの小さな表現を見逃すことのないよう，多角的な視点から，様々な表現の方法やその環境構成について保育者自身が体得しておく必要があるといえよう。宮里⁴⁾は「保育者自身が表現する行為は，子どもたちに大きな影響を及ぼす，生き生きと表現を楽しんでいる保育者とともにいることにより，子どもたちは，表現の楽しさを味わうことができる。」としている。

子どもの表現活動は，音楽表現でいうと，楽器演奏，歌唱などの演奏活動，身体表現でいうとお遊戯，ダンスなどが挙げられる。しかし，ここで実験調査していく「表現」とは，発表会などの出来栄を評価する「表現」のことではない。本研究は，友定⁵⁾のいう「子どもの心の動きを，表現された行動」であり，音楽（楽曲）をきっかけに身体表現がいかに成されていくのか，またその時感じ考えた子どもたちの内発的または外発的に起こりうる感情や行動を読み取り，そこに関わっていく保育者の課題について，探究していくものである。

現代社会のITの存在，さらにはIoT時代の到来と共に，幼児期に体験すべき自発的で創造性を持った自己表現の重要性は，IT出現以前よりもさらに大きいものであると筆者は考えている。

2) 清水 満・小松和彦・松本健義著『表現芸術の世界』萌文書林 2010年 p.42

3) 日本保育学会編 高橋敏之著「表現」『保育学講座3 保育のいとなみ』東京大学出版会 2016年 p.106 所収

4) 無藤 隆監修 宮里眺美著「保育者も表現する」『事例で学ぶ保育内容 領域表現』萌文書林 2012年 p.144 所収

5) 無藤 隆監修 友定啓子著「表現を支えるための保育者の役割」『事例で学ぶ保育内容 領域表現』萌文書林 2012年 p.185 所収

2. 研究目的

筆者らは、これまで保育者養成校の学生が「感じて表現することの過程」に着目し、即興的身体表現活動を実施する際の音楽からの「きっかけ」調査を行ってきた。感情が強く影響する曲、リズムの特徴が強い曲などから、身体による即興的な自己表現を行うことへの感覚的調査、また前回の調査では、ファシリテートの効果についても着眼した。それらの調査から、身体表現活動は楽曲を「きっかけ」にしている学生が大半であることが、結果となっている。

今回の実験・調査では、それら音楽をきっかけとした身体表現活動調査の目的をさらに明確にするため、子どもたちと保育者たちの身体表現活動について、実験と意識調査を試みた。「身体表現」「音楽表現」については、各園の保育方針によって取り組み方が様々ではあるが、即興的身体表現活動から子どもの行動パターンを観察し、保育者自身の気づきに注目しながら本実験を試みた。

II. 研究方法

子どもたちが音楽を「きっかけ」として、どのような即興的身体表現を行うかを、以下のような方法で調査した。また同園の保育者についての調査も行い、それぞれの身体表現活動についての視点や動向について分析していくこととした。実験後には、アンケート調査やインタビュー調査を実施している。

調査させていただいた園児たちと保育者の方々は、過去に専門家の指導による身体表現活動の経験は殆どないと回答している。

1. 対象

調査対象1：愛知県T市M保育園 園児57名年長児（2クラス）

実験は、一クラスずつ実施し、互いは接触しないよう配慮した。

調査日時：平成27年9月8日（火）

〈実験1〉Aクラス…園児28名と保育者（経験14年目）1名

〈実験2〉Bクラス…園児29名と保育者（経験7年目）1名

調査対象2：愛知県T市M保育園 保育者12名

調査日時：平成27年12月28日（月）

〈保育者の保育経験年数〉

年数	19	16	14	7	6	3	2	1
人数	1	1	1	1	2	2	1	3

調査については、個人名の記載をしないこと、保育者の評価をするものではないこと、ビデオの録画記録を公表しないことを明言し、保護者や保育者からの承諾を得た後に、実験調査を行った。

2. 調査方法 〈調査対象1と調査対象2について〉

1. 身体表現熟練者による身体活動のウォーミングアップ (AクラスもBクラスも身体表現熟練者が身体活動のウォーミングアップを行った) 動物などに例えながら、大きく・小さく・ねじる・回る・のびる・縮むなどの動きを行った。
2. 音楽鑑賞 ①「耳の長い登場人物」 [0:48] ②「水族館」 [2:34] ③「メンドリとオンドリ」 [0:42] 選曲については、耳馴染みのない楽曲で、同じリズムの繰り返しや連続的に同じメロディーが流れているものを避け、比較的珍しいリズムや音程に特徴があるものを選曲した。また中でも演奏時間が短いものを選択し、このことは子どもたちの集中力を期待するものである。また、園児たちには、先入観を与えないよう曲名は告げないこととした。
3. 即興的身体表現活動 曲目①→②→③の順に実施、活動の様子はビデオ撮影で記録
4. 活動後のインタビュー調査

記 録：ビデオ撮影をDVDに収録（園児への撮影は、園と保護者の許可を得ている）

使用曲：カミーユ・サン＝サーンス 組曲「動物の謝肉祭」より「耳の長い登場人物」「水族館」「メンドリとオンドリ」 ユニバーサルミュージックCD（ピアノ マルタ・アルゲリッチ他 1985年）

3. 調査対象1 園児の即興的身体表現活動調査

※観察の分析は、身体表現熟練者（高橋）と筆者によるもの

実験1. 〈年長児Aクラス〉 身体表現熟練者（高橋）が、園児や担任と一緒に自由に活動しながら進行役、但しファシリテートはしない。	実験2. 〈年長児Bクラス〉 担任が、園児と一緒に自由に活動しながら進行役、但しファシリテートはしない。 (身体表現熟練者（高橋）は、ウォーミングアップ時のみ活動し、即興的身体表現活動時には担任のみが、園児と活動する)
1. 身体表現熟練者による身体活動のウォーミングアップ（言葉による呼びかけや、「オノマトペ」表現によるもの）の活動の様子について ・子どもたちは初対面の指導者を気にしておらず、身体を自由にのびのびと動かしている様子がみられた。	1. 身体表現熟練者による身体活動のウォーミングアップ（言葉による呼びかけや、「オノマトペ」表現によるもの）の活動の様子について ・初対面の指導者であるが、指導者の呼びかけで身体を自由にのびのびと動かしている様子がみられた。

<ul style="list-style-type: none"> ・全員が積極的に動いていた（何となく周りに合わせて動こうという子を含む）。 ・自分なりの形で、動きを表現していた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・集団から離れた場所にいる子も、表現したいという動作があり、集団に混じりたいという気配や動作もみられ、表現のきっかけをうかがっている様子があった。
<p>2. 音楽鑑賞の様子について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どのような音楽が聴こえてくるのかという期待が大きく、心待ちにしている様子が印象的である。全員が興味深げに音が聴こえてくるのを待っていた。 ・感じたことを表現したくて、うずうずしている様子がうかがえた。 	<p>2. 音楽鑑賞の様子について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・音楽が聴こえてくると、自然に身体が動いてしまう子が多かった（鑑賞し切れていない子もいた）。 ・鑑賞したくても、周りが動き始めてしまったがため、動かざるを得ない子が出てきた。
<p>3. 即興的身体表現活動の記録について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自然に出てくる気持ちを抑えきれないといった様子。 ・身体全体を使い、広範囲で回遊魚のように動き始めた。 ・子どもたちは、同じような動きをしているが、曲によって速度や強弱を分けているように見えた。 ・一部の子どもたちは、大きな集団から徐々にグループ化していくように見え、そのグループで表現していた。 ・少数ではあるが、制止して身体を丸めたり反らせたりジャンプしたりという動作が入ってきた。 <ul style="list-style-type: none"> ・身体表現熟練者は子どもたちとは違った動きで活動するが、子どもたちはそれに関心を示さず、自分を表現することに没頭している。 ・担任の動きは全く気にしておらず、むしろ自分の動きを見せたがっているようにも見受けられた。 ・担任は時折、自分の動きを止め、自分のイメージを子どもたちに伝えようとする瞬間があった。しかし、伝わらないことにもどかしさを感じているように見受けられた。 	<p>3. 即興的身体表現活動の記録について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・やっと自由に動けるといった様子で、殆んどの子どもが回遊魚のように動き始めた。 ・動きに困った子どもは、音楽に合った動きを表現している子どもを見つけ、ヒントを得ようと観察している様子が見られた。 ・周りの様子をうかがい、真似するだけでなく自分の動きとして表現しようと、自分の表現を付け加えて動いていた。 ・周りの流れを変えようとする子どもが段々増えていった。 ・身体をくねらせたり、制止させたりして足でワカメの動きをしていた。 ・床を這って動く子が出てきた。 <ul style="list-style-type: none"> ・担任の動きから何かを得ようとしている子たちは、自分の表現を見つけようと模索している様子があり、決して担任と同じ動きで表現しようとはしなかった。 ・担任は、時々子どもたちの自由な動きに茫然と立ち尽くす様子が見られた。

<ul style="list-style-type: none"> ・次に聴こえてくる音楽に対して、身体を準備しており、曲のきっかけやイメージを大切にしている姿が10人ほどにみられた。 ・傍観している子どもはいなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・部屋の隅でじっとしているように見えた子ども、納得するまで音楽を聴いて、自分の動きを始めた。 ・始終傍観している子どもはいなかった。
<p>総合所感:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・身体表現熟練者とクラス担任の子どもたちへの関わり度合いに、差はみられなかった。 ・曲目が①→②→③と進んでいくに従って、個々の表現の仕方に特徴が見られるようになった。 ・集団による同じような動きから、グループ化した動きや個々の動きへと変化していく子どもたちがいた。 ・保育者は、部分的に、子どもたちの動きに納得できない様子もみられた。 	
<p>4. 活動後子どもたち（全員）へのインタビュー調査（担任によるもの）</p> <p>①・僕たちは海賊で、敵が来たみたい <ul style="list-style-type: none"> ・チーターに追いかけている ・泥棒になった気分 </p> <p>②・魚が暗い所を泳いで隠れている <ul style="list-style-type: none"> ・ハロウィンみたい ・闇の中 ・早く泳ぎたくなった </p> <p>③・怪獣の足音 <ul style="list-style-type: none"> ・追いかけてこする動物たち ・逃げたくなる ・追いかける ・最後の音で、ジャン!! <p style="text-align: right;">（原文のまま） 等々</p> </p>	<p>4. 活動後子どもたち（全員）へのインタビュー調査（担任によるもの）</p> <p>①・お化けが来た <ul style="list-style-type: none"> ・隠れなくなる ・おばけがヒューって飛んできそう </p> <p>②・雨がポロポロ降っているよう <ul style="list-style-type: none"> ・風が流れているみたい ・わかめが踊っているよう ・クリスマスの気分 ・夢の中にいるような </p> <p>③・ねずみが追いかけてきた <ul style="list-style-type: none"> ・リスが来たので、熊になって威張ってみたい ・鳥が巣にとまっている ・時計の針が動いている ・森の中を虫が飛んでいる ・ライオンを見ている気持ち ・最後の音は、鐘のよう <p style="text-align: right;">（原文のまま） 等々</p> </p>

注意：実験1と実験2は、全く同様に1. 2. 3. 4を時系列に行った。

園児の中で活動する身体表現熟練者やクラス担任は、ファシリテートはしていない。

4. 調査対象2 保育者の即興的身体表現活動調査

調査対象2の保育者に対しても、調査対象1の調査方法の1. 2. 3. 4の項目に沿って同じように実験を行った。実践記録は、保育者の評価に繋がる危険性もあることから、ここでは全体の傾向を記載することとする。

保育者への実験内容	保育者の観察記録
1. 身体表現熟練者による身体活動のウォーミングアップ	1. ・それぞれ思いのまま表現しており、言葉による説明や、「オノマトペ」表現でのウォーミングアップであることから、身体表現の苦手（自己申告）な保育者も、自分なりの動きで表現できているように見受けられる。
2. 音楽鑑賞 (言葉からの先入観を避けるため曲名は告げない)	2. ・耳馴染みのない曲（初めて）であることを実感している様子が殆どの保育者にみられた。 ・聴いたことが無いことに対する不安な表情や、既に曲に対する抵抗感をあらわにしている保育者もいた。
3. 即興的身体表現活動 総合所感： ①②③曲の楽曲ごとに得意、不得意の様子がハッキリとみられた。直接的な表現は一切見られず、特に形を気にしている様子が目立った。	3. ・12名中6名は曲のリズムに合わせて、手や腕を使い、波打つような表現の繰り返しがみられた（高さなど個人差あり）。 ・動きが優れていなくとも、曲によって、身体の使い方の大小や身体移動のメリハリが表われていた。 ・曲の動きとして相応しくないとと思われる動きで、自身の表現を強行に続ける保育者もいた。 ・周りを気にして動いている保育者が半数いた。 ・技術的なことを求めているのか、いかに身体を使って表現（動かす）すればよいか、といったざこちなさが見られた。
4. 活動後保育者へのインタビュー調査（原文のまま） (ポジティブ傾向)	<ul style="list-style-type: none"> ・頭の中でイメージしていた時よりも音楽に合わせて動き出した時の方が、より動きやすかった。 ・鑑賞だけでは型にはまった発想しかできず、動いてみると解放感があって自由に表現できた。 ・特徴的な曲なので、動けるのだろうか、と心配したが、いざ動いてみると、音楽に動かされている自分に気が付いた。 ・三曲のそれぞれの特徴に合わせて動いてみたら、自分の曲の好みが見えてきた。 ・日頃の曲の好き嫌いが影響していることがわかった。

〈ネガティブ傾向〉

- ・鑑賞のみの方が自由にイメージできていた。動いてみると全く身体と曲が噛み合わず、苦しい表現となった。感じたものを上手く表現できない自分が苦しくなった。
- ・テンポがはっきりとしているものや、リズムのはっきりとしていて、連続的にのりやすい曲でないイメージが湧いてこない。
- ・リズムに引っ張られないと、何をしたいのかわからない。
- ・形をしっかりと考え整えた後でない、音楽へのイメージだけでは、動きがしづら
- い。
- ・動きの形や、リズムを覚えて、「1. 2. 3. 4」というようにパターン化したものを描いてからの方が動ける。
- ・曲のイメージがあっても、実際に動くとなんか何をしたいのかわからなくなる。

(類似したものは、省略)

Ⅲ. 実験調査結果

①園児の即興的身体表現活動調査結果

今回の園児たちへの実験調査結果は、子どもたちにとって未経験の即興的身体表現活動であることから、視覚的に十分な動きを確認できたとみられる園児は全体の約40%であった。これに関しては、今後継続的に、活動を記録していきたいと考えている。

今回の調査を段階的にみていくと、子どもたちが聴き馴染みのない音楽に対して積極的な受け取り方をしていること、また聴きたいという意欲的な態度が見られることなどが挙げられ、新たな楽曲選択による子どもたちの鑑賞への興味を期待させるものと考えられる。

さらに楽曲をきっかけとした身体表現活動の実践では、園児らが聴き馴染みのない楽曲に対して、抵抗なく身体活動に取り組んでいる様子が見られた。最初の段階では、ほぼ全員が同じ動作を繰り返していたが、集団であるが故の活動に対する安心感や、自由な動きが許される解放感が感じられ、「回遊魚」のような動きを繰り返していた。しかし時間が経つと、集団から外れグループ化し、そこでの表現を形成しようとする園児もみられた。さらにそのグループの中でも特徴を出していく子ども、そこから独立していく子どもも出現していた。また、最初の回遊魚らしき大きな流れに乗れず、部屋の片隅にいた子どもは、動いている子どもたちをしばらく見ているうちに、周りの動きに入ろうとしたり、自分なりに表現しようとしたりする行動もみられた。

事後インタビュー調査での子どもたちの楽曲に関する感じ方については、AクラスBクラスに共通するキーワード(曲目と一致する語彙)が発言されており、各々のイメージではあるが、曲調や曲想を捉えることができていたといえよう。

一方、子どもたちと一緒に動いている身体表現熟練者や保育者は、感じるままの勢いある動きに気を付けながら(怪我や喧嘩など)、園児たちに何か特徴のある動きをさせようと、それとは違う動きを試みている。しかし園児たちはその動きを真似るだけでなく、それを

「きっかけ」として、自分の動きを見せたがる動向があった。

幼稚園教育要領にある領域「表現」は、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」である。今回の活動で園児たちは、これらの楽曲をきっかけとして、感じたことや考えたことが自分なりに身体を使って表現できること、或いはその可能性を感じていたといえよう。またこの活動の過程を通して、音楽から受けるイメージは、個人の創造性に働きかけ、それを自分らしく表現する一面となり得ることも体験できたと考えられる。

② 保育者の即興的身体表現活動調査結果

保育者たちの即興的身体表現活動では、「動き方」を表そうとする傾向が強く、半数以上の保育者が、その見栄えや観かけの表現に重きを置いていた。最初の段階では、動きが殆どなく、棒立ち状態であった保育者もいたが、曲が進むにつれて動きが表れ、左右上下回転などをパターン化して表す保育者が増えてきた。しかしながら、インタビュー記録にもあるが、手足の動かし方など振付の見栄えに意識がいきっており、感じたままを表現するには、その技術レベルの限界を感じてしまう、という保育者の意見が多くあった。また、聴き馴染みのない楽曲を聴いていることを不安に思う保育者が多く、楽曲の楽しさを共有している子どもたちの反応とは大きく違っているように感じられる。ここで、保育者各々の領域「表現」の捉え方が問われることとなるのである。

田辺は⁶⁾、平成元年幼稚園教育要領が改訂された領域「音楽リズム」から領域「表現」が「動きのリズム」から「動きの表現」への移行となったにも関わらず、根強く「音楽リズム」が残っていることを今から10年前に調査している。そしてそれは、10年経った今も課題として残されたままではないかと危惧せずにはいられない。音楽を聴いて即興的身体表現をしている園児たちの生き生きとした活動の様子に対し、今回の保育者たちの記録や感想には、拍子の中で繰り返されるリズムに、動きを合わせて安定した身体表現がしたいという願望が強く、それゆえの動きの不具合や不快感が60パーセントの保育者に見て取れたのである。

また、園児と同時に活動した保育者についても、子どもたちの躍動感溢れる動きや、楽曲にのめり込んでいる園児の動作の一面を認めながらも、それを不快に思う様子や受け止められないという場面がみられた。つまり子どもたちの自由な動きが乱雑に思えたり、リズムの一貫性のない動きを不安に感じたりしており、保育者たちの疲れを招いている様子が否めないのである。「こんなのでいいのでしょうか。」「子どもたちのデトックスでしょうか。」という保育者の実験後の言葉には、調査目的の根幹に触れるものがあり、筆者たちが考える表現教育の着目すべきポイントがあるといえる。

遠藤⁷⁾は、「幼児の身体表現の指導に対する保育者の意識について」の中で、保育者たちが幼児に対しての身体表現の言葉がけの難しさや、身体表現を行う際のピアノを用いた伴奏やアレンジの難しさが原因で「子どもの表現をうまく引き出せない」「十分に楽しめない」

6) 田辺圭子著「保育内容における身体表現に関する一考察」『北陸学院短期大学紀要 第38号』2006年 p.61 所収

7) 遠藤 晶著「幼児の身体表現の指導に対する保育者の意識について」『武庫川女子大学研究紀要 (人文・社会科学)』2006年 p.95 所収

などのアンケート調査結果を出している。このように表現の分野は、過去の規範に則って行われてきたメソッドや、自由ではあるが曖昧な独自性の強い領域であったりすることも考えられるため、保育者たちの「表現」に関する保育計画や保育方法に迷いや不安を与えていることも見逃してはならないことである。

IV. まとめと今後の課題

今回の実験調査から、子どもたちは、楽曲から自由なイメージを持って活動していたこと、また身体を使うことで、素朴で直接的ではあるが、自己のイメージを表現できると感じ取って活動していたことが見て取れる。さらに、保育者たちが曲の好みによって表現の困難さを感じることに對して、子どもたちの楽曲の許容範囲については、予想を越えたその柔軟さに新たな発見があったと保育者たちは述べている。

当然のことながら、脳で考え言葉で伝え、既成された表現を取り入れる大人たちの技術は、幼少期の子どもの成長過程に必要な場合も多々ある。しかし今回は、子どもたちが自分なりの表現について感じ考えようとしたこと、音から感じた身体は無意識ではあっても、多様な動きを可能とすることなどを体感していたといえよう。また自分なりに感じて行った表現が、自他共に存在を確認するための貴重な要素であることを、音楽をきっかけとして体験できていたのではないかと推察できる。

高橋⁸⁾は、「『表現』は、強制や義務から生じるものではなく、子どもの内面にある表現欲求や内発性によって発現し、表出されるものである。」—中略—「結局、子どもの表現をどのように育てていくかは、保育者の日々の保育実践にかかっており、そのためにも資質能力の高い、実践的な指導力を有する保育者を養成する必要がある。」と述べている。益々複雑化する現代社会に伴い、現場の保育者は、さらに多様な事項に表現することのスキルが求められるはずであろう。

今後は、楽曲別の音楽をきっかけとした身体表現活動と子どもたちの感情表現との関係について調査を実施し、それを保育者の視点から調査・分析していきたいと考えている。

〈謝辞〉ご協力いただいたM保育園の職員の方々と園児の皆様に深く感謝いたします。

参考文献

- 佐藤 学著「『表現の教育から『表現者』の教育へ』『表現者として育つ』東京大学出版1995年 p.221 所収
 柘田 恵著「幼児期における感情の理解と表情表現の発達」『京都大学大学院教育学研究科研究紀要 第25巻 第2号』2014年 p.151 所収
 東洋英和女学院大学死生学研究所編 西 洋子著「表現における子どもと影—創造への対話—」
 『Annual of the Institute of Thanatology, Toyo Eiwa University 死生学年報 2014 語られる生と死』リトン出版 2014年 p.157 所収

8) 日本保育学会編 高橋敏之著「表現」『保育学講座3 保育のいとなみ』東京大学出版会 2016年 p.119 所収